

小学生の学習観と被援助志向性との関連

真田穰人（広島大学大学院）

キーワード：学習観，被援助志向性，小学生

問題と目的

近年，学校教育において主体的・対話的で深い学びの実現が求められており，教育現場では，協同学習の活用が推進されている。協同学習場面では，学習者が問題を意識した際に相談し合うことで，学びが生まれることが考えられる。

しかし，中学生の学習に関する相談について調査した石隈（1999）は，学習の問題を意識しても誰にも相談しない生徒が2割以上いることを指摘している。また，町（2009）は，協同学習に抵抗感を示す児童が存在することを指摘している。

学習において友人と相談したり，協同的に学習を進めたりすることができる子どもと，そうでない子どもの背景には，学習観の違いがあることが考えられる。学習において援助を求めるかは，他者と協力し合い，助け合うことの意味とその働きについての認識が影響している可能性がある。そこで本研究では，学習観が友人に対する被援助志向性に及ぼす影響を明らかにする。

方 法

調査対象者 小学校6年生91名（男子46名，女子45名）

調査内容 ①学習観 協同作業認識尺度（長濱・安永・関田・甲原，2009）を用いた。協同作業認識尺度は，「協同効用」，「個人志向」，「互恵懸念」という3下位尺度18項目で構成されている尺度である。小学生用に改変して使用した。

②被援助志向性 友人に対する被援助志向性尺度（本田・新井・石隈，2011）を用いた。「被援助に対する懸念や抵抗感の低さ」と「被援助に対する肯定的態度」の2下位尺度13項目で構成されている尺度である。学習場面に関連のある12項目を選定したうえで小学生用に改変して使用した。

手続き 集団場面において一斉に質問紙を配布し，小学校の教室で実施した。児童に対する教示として，①成績とは無関係であること，②回答しなくてもよいという権利があること，③調査内容は，研究の目的にそってのみ使用されることが伝えられた。

結果と考察

はじめに「協同作業認識尺度」「被援助志向性尺度」の内的整合性の検討を行った。クロンバックの α 係数を求めた結果，協同作業認識尺度の下位尺度である「協同効用」は $\alpha = .90$ ，「個人志

Table1 被援助志向に対する重回帰分析の結果

	被援助に対する 懸念や抵抗感の低さ	被援助に対する 肯定的態度
協同効用	.18	.58 ***
個人志向	-.42 ***	.06
R^2	.25 ***	.32 ***

*** $p < .001$

向」は $\alpha = .76$ ，「互恵懸念」は $\alpha = .41$ であった。また，被援助志向性尺度の下位尺度である「被援助に対する懸念や抵抗感の低さ」は $\alpha = .83$ ，「被援助に対する肯定的態度」は $\alpha = .84$ であった。

「互恵懸念」の内的整合性が低かったため，以後の分析では除外することとした。

次に被援助志向性の2側面に対して，協同作業認識の2下位尺度を説明変数とする重回帰分析を行った。その結果，2つの側面の説明率が有意となり，協同効用から被援助に対する肯定的態度に対して正の関連が示された。また，個人志向から被援助に対する懸念や抵抗感の低さに負の関連が示された（Table 1）。

これらの結果から，他者と協力し助け合いながら学ぶという認識が被援助に対する肯定的な態度につながることを示唆された。一方，個人志向は被援助に対する懸念や抵抗感の低さに負の影響を与えていた。長濱他（2009）は，協同作業認知が重層的な認知構造をもつ可能性を指摘しているが，それらの構造と被援助志向性について，今後さらに検討していく必要があるだろう。

引用文献

- 本田真大・新井邦二郎・石隈利紀（2011）. 中学生の友人，教師，家族に対する被援助志向性尺度の作成 カウンセリング研究，44（3），254-263
- 石隈利紀（1999）. 学校心理学—教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス. 誠信書房
- 町 岳（2009）. 協同学習に抵抗感を示す児童をどう支援するかⅡ～担任がとらえた，協同学習に抵抗感を示す児童の理由～教育心理学会発表論文集. 51. 244
- 長濱文与・安永 悟・関田一彦・甲原定房（2009）. 協同作業認識尺度の開発 教員心理学研究，57，24-37